

# 同時的方向づけシステムの理論の再検討

蜂 屋 良 彦

## はじめに

人は、自己をとりまく他者や環境に対して、どのように感じ評価し働きかけようとするのか。このことに関して、ニューカムは同時的方向づけシステム (system of co-orientation) の理論を提唱した (Newcomb 1953, 1959, 1961)。

彼は、クーリーやミードらの社会学者やレヴィン、ハイダー、フェスティンガーといった社会心理学者からの影響を強く受けながら、彼自身が積み上げて来た社会的行動に関する理論や経験的資料を統一的に説明できるものとして、非常にシンプルなモデルを発表した。今日この理論は、態度形成・変容に関する数多くの認知的整合性理論の中の一つとして小さく扱われているに過ぎず、この理論の存在すら知らない若い社会心理学者も多いのが実状である。しかしそこには社会心理学に関する基本的な考え方が的確に示されている。提唱後50年を経た今日、この理論の有効性とその限界を吟味し、さらにその発展の可能性を探ってみることは有意義なことと思われる。

ニューカムの社会心理学では社会的相互作用の研究をその中心に置く。社会的相互作用とは、主体と客体との絶えざる交替関係の中での二途の影響過程を意味する。彼の言葉では「われわれの関心には、終始、個人心理学者の関心とは異なった特徴がある。われわれは社会心理学者として、個人の行動についての専門家の諸説を借用して、結局はわれわれ自身の次の二つの問題に適用しようとするものである。すなわち、個人内の過程 (within-person processes) は他者との相互作用によってどのような影響を受けるか、ということと、個人間の相互作用の過程 (between-person processes) は個人の体制によってどのように影響を受けるか、の二つである。」 (Newcomb, et

### 同時的方向づけのシステムとは

個人のもつ社会関係を構成する最小限の要素として、二人の人間AとB及び彼らをとりまく環境の中の共通の対象Xを設定する。例えば二人の政治家AとBがある外交政策Xに対してどのような関わりをもつかということを考えてみよう。このA、B、Xの三者の間には、AがXをどう認知し評価し行動しようとしているのか（AのXに対する方向づけ、以後A-X関係と記す）、BがXをどう認知し評価し行動しようとしているのか（B-X関係）、AとBとはどのような対人関係にあるのか（AのBに対する方向づけ、A-B関係）という三種の方向づけが考えられる。そして、これらの各方向づけは相互に独立ではなく、相互規定的であって、それゆえ一つのシステムをなすとする。

このモデルに関して次の基本的前提が置かれる。1. 人は、環境への方向づけとは無関係に（in environmental vacuum）、対人的方向づけを決めるのではない。2. 人は、他の人との関係とは関わり無く（in social vacuum）、環境への方向づけを決めるのではない。3. したがって、人Aは、環境Xと他の人Bとに同時に方向づけ（simultaneous orientation、以後 co-orientation と呼ばれる）をもつものである。4. このシステムの成立の要件は、二人の人間にとってのXの重要性（importance）と関連性（relevance）とであり、この両者が共に高いときにのみシステムA-B-Xが成立する。5. このシステムは、均衡がとれている（balance）か、均衡がとれていない（imbalance）か、のいずれかである。6. システムの不均衡は、コミュニケーションを引き起こす。7. コミュニケーションの結果、システムは均衡を回復するか、それが不可能であるときには、システムを解消する。

ここで重要な概念の内容は次の通りである。方向づけ（orientation）：これは、他の人物や環境の中の対象に対する個人の動機的、情緒的、認知的側面を含む反応への準備体制で、広い意味での“態度（attitude）”と同等の意味をもつ。重要性（importance）：環境の中の対象Xが個人の価値体系の中心に位置する程度を表す。例えば、政治家にとっての経済政策、運動選手にとってのトレーニング方法などは重要性の高い問題と言える。関連性（relevance）：対象Xが、A、B兩人にとって共通関連性が高いか否かを表すもので、趣味的なものは二人の人物にとって共通関連性が必ずしも高いと

は言えない。重要性和関連性とは、一見酷似しているようではあるが、概念レベルでは区別されるべきものである。均衡 (balance)：システムが成立したとき、そのシステムは均衡状態か不均衡状態かのいずれかである。三つの方向づけの間に相互矛盾が無い場合、例えば、 $A-B$ 、 $A-X$ 、 $B-X$ が全て肯定的方向づけの場合、あるいは、 $A-B$ が肯定的で $A-X$ 、 $B-X$ が否定的の場合は均衡状態である。例えば、二人の仲の良い政治家が、ある外交政策に対して共に賛成、あるいは共に反対の態度をもつ場合には、このシステムは均衡状態である。 $A-B$ 関係が良好で $A-X$ と $B-X$ とが食い違う場合には、このシステムは不均衡状態といわれシステム緊張が高まっている。このような内部矛盾が存在するとき、 $A$ と $B$ の間にコミュニケーションへの圧力が高まり、コミュニケーションによってシステムの均衡回復を図ろうとする。コミュニケーションの後の均衡回復の有り様としては、 $A-X$ と $B-X$ とが一致する場合、あるいは $A-X$ と $B-X$ とが不一致のままで $A-B$ 関係が否定的方向に変化する場合が考えられるが、全く別の緊張解消法として $X$ の重要性や関連性を低めてシステムそれ自体を解消することによってシステム緊張をゼロにしてしまうこともありうる。ここでシステム緊張を解消することとシステムを解消することとは区別されねばならない。

## 二種の同時的方向づけシステム

最小限の社会的状況では、一つの社会的場の中に同時に二人の人物が存在する。各人はそれぞれの個人的 $A-B-X$ システムを所有しているので、個人システムが二つ存在するのが社会的状況の最小単位となる。これらの個人システムは個人 $A$ あるいは $B$ によって認知された主観的社会関係を表すものである。これに対して客観的、集合的システムがこの状況に一つ存在する。以上のことから個人システムと集合システムの二種が想定される。これにともなって社会的相互作用も個人内でのものと個人間でのものの二種が考えられる。個人 $A$ あるいは $B$ の認知空間内での社会的相互作用と集合体の中での $A$  $B$ 間の客観的な社会的相互作用とである。個人 $A$ あるいは $B$ の認知空間内での相互作用のみで均衡を回復してしまうことは自閉的緊張解消と呼ばれている。

この二種のシステム、個人システムと集合システムとの間の力動的関係について、ニューカム (1961) は「もし、集合システムが実際に均衡を欠いて

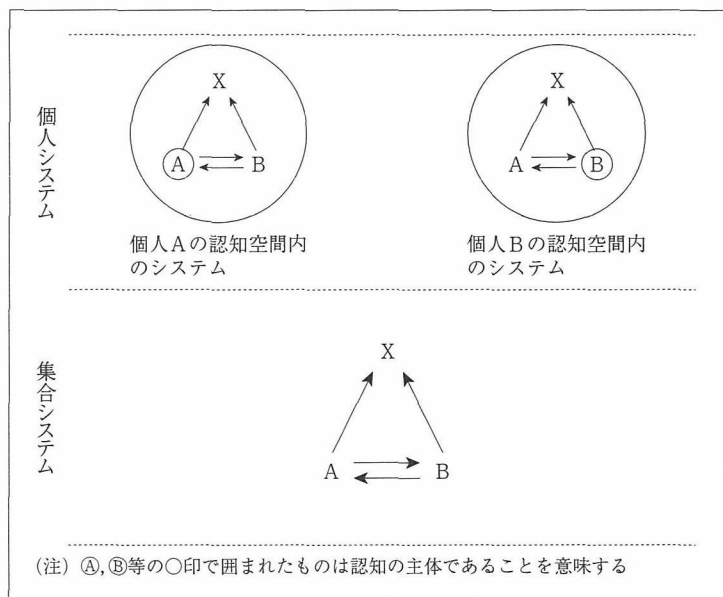


図1 個人システムと集合システム

いるとき、集合体のだれかがこのことに気づく。これによって、その個人システムの側にシステム緊張が生じ、これがコミュニケーションへの圧力となり、集合システムの不均衡を解消して行くだろう。逆に、個人システムの不均衡が集合システムとの照合の結果から事実でないことが判明すれば、その個人は自らの思い違いを認識し、個人システムは緊張を解消して行くことになる」と述べている。以上のことを図にすると図1のようになる。

### このシステム理論の限界

個人システムにしる集合システムにしる、均衡状態を保持し万一不均衡が生ずればそれを解消しようと努めることによって環境への適応性は一般的には向上する。個人が対象Xにたいして何らかの方向づけをもとうとするとき、自分一人ではその判断に自信がもてなくて不安になる。自分と他者との意見が一致しておれば、それだけ判断の正しさの可能性が高まり自信をもって環境に働きかけられる。もし意見が食い違っておれば他者とのコミュニケーションを通じて自己の方向づけが慎重に再吟味され、その妥当性が高まるであ

ろう。均衡のとれた、特にA-B間が肯定的なシステムは、個人や集団の精神生活や社会生活を強力にサポートしていることが多い。言い換えれば、首尾よく機能しているシステムは、人の和と正確な判断を同時に提供してくれているのである。

ところで、フェスティンガー (Festinger, 1957) の認知的不協和理論にせよ、この同時的方向づけのシステムの理論にせよ、いわゆる認知的整合性理論と呼ばれているものは一般的に言って、個人内あるいは集団内の矛盾を無くし均衡のとれた状態を生むことを一応の目標とするが故に、次のような限界をもつと言えよう。

システム内の矛盾の解決は、当初は確かに外部環境への適応の階段を一段上ることになることが多い。一旦均衡のとれた状態に到達しこれが長期化すると、システムは硬直化しやすく従前の均衡状態にこだわり続ける。均衡状態にある限り、人は再思考のためのエネルギー、あるいは個人間の交渉のためのエネルギーを節約できるのがその原因の一つであろう。しかしながら、システムは常に変動しつつあるより大きな外部環境の中に置かれているのであり、システムと環境との間に不適合な関係を発生させるような新たな環境変化が生じ続けているはずである。このことに敏感なシステムであることはより一層の適応のために重要なことである。認知的整合性理論の中ではこのようなプロセスについてはあまり言及されていない。もちろん、これらの理論がこのことを否定している訳ではなく、不均衡から均衡への変化のプロセスの解明に重点を置いているに過ぎないのである。

そこで、システムが次の段階として、均衡から不均衡に移行する過程、あるいはこの移行を妨げようとする条件等について検討することは、認知的整合性理論にとっても有益なことではないかと思われる。

## システムの発展過程

ここで、システムの発展過程についての一つの試案を提示する。それは、不均衡—均衡—探索・螺旋状発展モデルとでも呼べるものである。これは、システムが内部環境を整えると同時に変動し続ける外部環境の正確な情報を探索し、より良い適応を求めることを想定するものである。これを図示したのが図2である。P<sub>1</sub>よりP<sub>3</sub>に至る過程の分析が従来の認知的整合性理論では主になされたのである。P<sub>3</sub>からP<sub>4</sub>を経てP<sub>1</sub>'に至る過程では実に様々

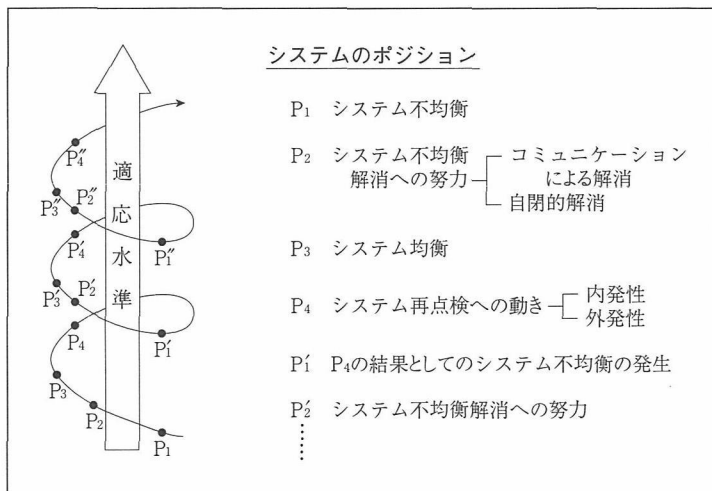
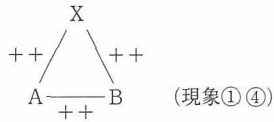


図2 システムの不均衡—均衡—探索—螺旋状発展モデル

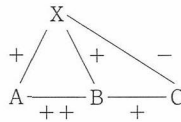
の興味あるドラマが展開されるようであるが、これまでこのことについて議論されることはほとんどなかった。そこで本論では、P<sub>3</sub>を頑なに守ろうとする働き、P<sub>4</sub>に移ろうとする働き、この間の葛藤を具体例にあたりながら検討してみたい。

システムの均衡を頑なに守り続けようとし、内部矛盾の拡大を極力避けようとする働き 一旦システムが均衡状態に近づき、あるいはそれに到達すると、その状態を壊そうとする内外からの働きかけや批判的情報に対して門戸を閉じ、内部矛盾の拡大を最小限に抑えようとする働きが生じやすい。それはなぜなのか。システム内の個人の意見の相違が表面化すれば、一旦獲得した人の和を壊す危険性が出てくるし、また、意見の相違を調整するために多くの時間とエネルギーを消費しなければならない。これらのことを避けようとするのは、自然の流れであろう。その結果、重要な問題は先送りされ、気がついたときには、外部環境への対応に非常な後れを取り、最終的にはシステムが大きな打撃を被ることとなる。このことを考えるうえで参考となりそうな事例を次に取り上げてみたい。集団凝集性（本論の文脈で言えばA-B関係の親密さに相当する）が高まるにつれて、その集団内に生じやすい病理的色彩を帯びた現象を記述したジャニス（Janis 1972）の報告は、この

## 1. システムの均衡よりもたらされる過信



## 2. システムの均衡を作りだし維持するための無理な努力 (現象②③⑤⑦)

3. いったん形成されたシステム均衡が生み出す排他性  
(A, BはCを排除しようとする) (現象③⑤⑧)

## 4. 2つの個人システム間に不一致が存在するときに生じるはずのコミュニケーションを妨害(自己規制)する社会的地位の落差の存在 (現象③⑤⑥⑦⑧)

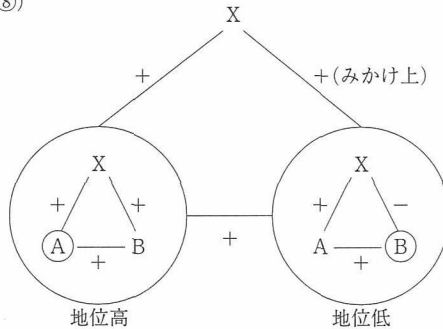


図3 グループシンクの分類

点で極めて示唆に富むものと言えよう(後掲の《事例1》を参照)。

ここに報告されている8つの現象をA-B-Xシステムの観点から、いささか強引ではあるが、大きく4つに分けてみることにする。1. 均衡状態がもたらす過信(現象①④) 2. 均衡を作り出すための無理な努力(現象②③⑤⑦) 3. 一旦形成された強い均衡状態が生み出す排他性(現象③⑤⑧) 4. 二つの個人システム間に不一致が存在する際に生じるはずのコミュニケーションを自己規制(妨害)してしまうところの、AとBの間の社会的地位の落差の働き(現象③⑤⑥⑦⑧) これらを図示すると図3となる。以上のことから、

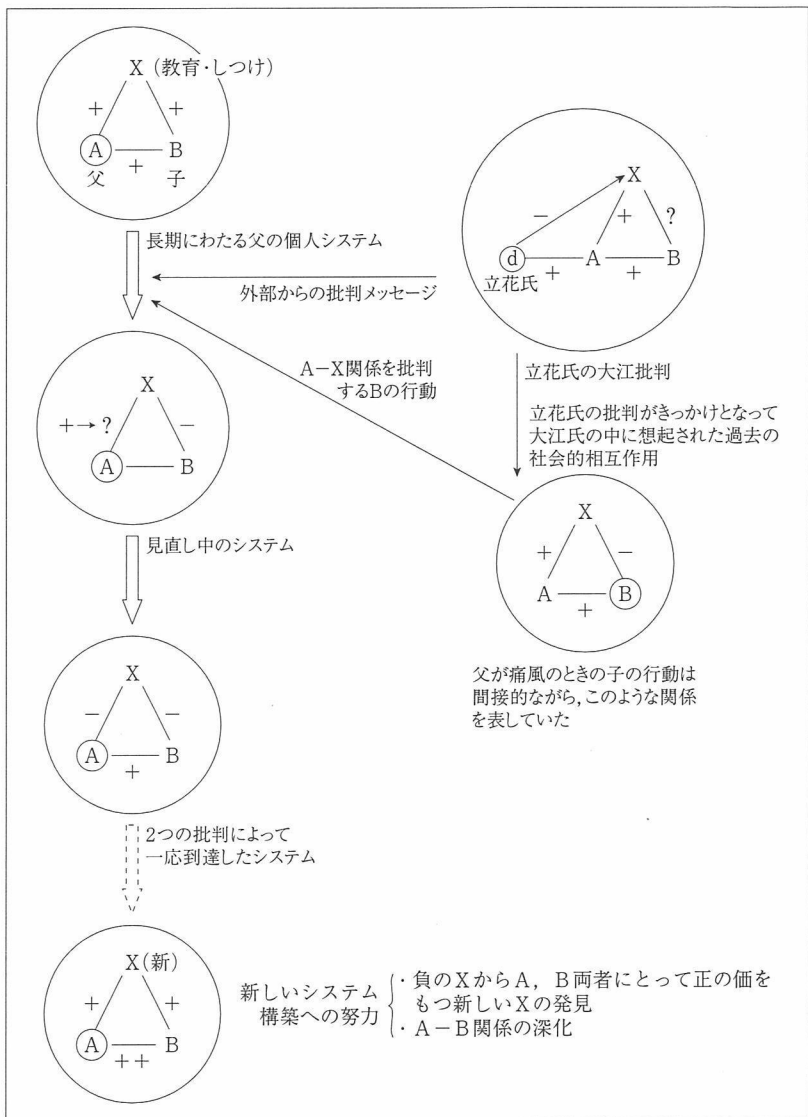


図4 父と子の関係の変化



システムに均衡がもたらされそうになったり、一旦均衡状態に入ったりすると、それを変えないでおこうとする強い働きが集団の中に様々な形で現れてくることがわかる。この働きが結果的には、新しい事態での集団の適切な意思決定や行動を妨げることになる。

外部からの批判的な情報によってシステムの均衡が崩れ、新しい均衡に移行しようとする働き 次にあげる事例は、一旦均衡を保っているとされていた個人システムにおいて、外部からもたらされる批判的情報や集合状況での社会的相互作用によって、Aがその非を認めてその個人システムの見直しを行い、新しいシステム作りに入ろうとするものと解釈できるのではないだろうか。これは、1994年国際家族年記念講演『「家族のきずな」の両義性』（大江健三郎1995）で語られたものの一部分である（後掲の《事例2》を参照）。

ここに述べられている経過は、A-B-Xシステムの視点から、図4のように描くこともできるのではないだろうか。大江氏が永年にわたり息子のために最善だと思って行って来た教育は、息子からも最高のものと思われるのと大江氏は信じていたに違いない。ところが、尊敬する立花氏から寄せられた批判が起爆剤となって、十数年も前に息子が父に示した特異な行動（社会的相互作用）が想起され、それへの新たな意味付けがなされ、大江氏の個人システムの再点検が開始されたのである。信頼を寄せる部外者からの批判を謙虚に受け止めること、システムを構成する他者から発信される批判的行動（社会的相互作用）に鋭敏であること、さらには自己変革への積極的でしなやかな姿勢をもち続けることがなければ、このような個人システムの見直しや再構築に向けての努力は出現しなかったと思われる。

## 結 語

一つの組織ができ、環境との間で一応の適応状態が得られると、その組織を改変してゆくことは、なかなか難しい。これまでの議論からも明らかなように、その組織の構成員の意見が等質であるときにはなおさらである。しかし、外部環境は常に変化し続けるのであり、気づかぬ間に後れを取りやすい。したがって、首尾よくいっている時ほど自己あるいは自集団を見直し続ける必要がある。このことは、かなり意図的に努力しなければ実現できないことのように思われる。これまでもこのような努力は各方面でなされて来た。

例えば、集団意思決定の際に満場一致をすぐに良い決定とは認めず、いちゃもん付け役をわざわざ設定して意図的に集団内にコンフリクトを導入することによって、より良い結論を導こうとすること (devil's advocate approach) などいくつかの試みがなされてきた (詳細は蜂屋1999参照)。組織を預かる管理者の中にはこのようなことを様々な形で実践している人がある。その一例を挙げよう。「お客様の苦情は100パーセント正しい」これは日本を代表する電機製造会社の会長から数年前に私的会合で筆者が直接聞いた言葉である。いつも社員たちにこのように語りかけていたそうである。時間の制約でその真意をたずねることはできなかったが、このような発言について以下のような解釈も可能であろう。

顧客の中には無理難題を押し付けたり、もっと悪い場合には、自分の誤操作を棚に上げて製造会社の責任を追求してくる場合もあるだろう。それでも「お客様の苦情は100パーセント正しい」と受け止めよと会長は言う。世界で最高と自負している社員たちが素直にこの言葉に応じられるのだろうか。この言葉を耳にしたときに多くの社員は次のように感じたことであろう。「そんな人の良いことを言っていたら会社はもたない」「世の中良いお客ばかりではなく故意に悪質なクレームをつけてくる人だっている」「会社の側が100パーセント正しいこともある」このような社員側の反論は先刻承知の上で、それでも敢えて「お客様の苦情は100パーセント正しい」と断言、90パーセントではない、100パーセントなのだということに、深い意味があるように思われる。

自分がやっていることは完全に正しいと思っているときが一番危険な時である。自分の親しい者が同じ意見であるときはなおさらである。自分たちの会議の結論は全員一致だから間違いのないと思い込んでいるときが大きな落とし穴が待っているときである。この老経営者は永年の体験から、自信のある製品を作ったときほど、また、職場全体がそう信じているときほど、この製品には欠陥があるのではないかと、一層鋭い自己批判精神を発揮しなければならない、それが一層完璧な製品製造への道だと考えていたのではないか。

以上、本論においては、人を同時的方向づけをもつ存在としてとらえるとともに、それゆえに生じる利点と限界を論じ、それを超克する道を探ってみた。

## 《事例1》

## 「グループシンク」の犠牲者

Janis (1972) は『グループシンクの犠牲者』(Victims of Groupthink) なる著書の中で、米国における対外政策の決定過程について詳細な分析を行ない、個人的には極めて優秀な成員からなる集団（ここでは大統領とそのブレインたちより成る集団が中心になる）が満場一致のもとに、とんでもない誤った決定を下してしまうこと（groupthink；グループシンク 集団的浅慮）を報告している。例えば、ケネディ大統領とそのブレインによるキューバ侵攻作戦の決定、ジョンソン大統領とそのブレインたちによるベトナム戦争における北爆の決定、などである。優秀な才能をもった個人が「グループシンク」の犠牲者となってしまう、後で考えると実に愚かな集団意思決定をしてしまうのはなぜなのか。Janis の分析をまとめてみるとつぎのようになる。

集団のまとまり（凝集性）が高まるにつれて集団の中に現れやすい現象として、つぎの8現象が挙げられている。

- ① 極度に楽観的でどんな危険な策でも取らせてしまうような、われわれの集団は破綻することなどないのだという思い上がった幻想

（実例）中央情報局 CIA が立案したキューバ侵攻作戦を無批判に受け入れたケネディ大統領側近集団は、亡命キューバ人の侵攻作戦に米国がかかわっているという事実を隠し通せるとの誤った信念を持っていた。計画が漏洩し始めた後でも、この信念は揺るがなかった。世界中が急速に反米感情をもつに至るという危険性を考えることができなかったのである。ベトナム戦争時に度重なる失敗にもかかわらず、エスカレート作戦を続けたジョンソン大統領とその側近集団も同様の態度を示した。米国が強大な軍事力行使の決意を示せば北ベトナムも米国の意を解して戦線の縮少をはかるだろうという信念をもち続けて、それを崩そうとはしなかったのである。

- ② 自分たちに不利と思われるような情報を割引いて受け取ってみたり、適当に歪めてしまって不利ではないように知らず知らずのうちに加工してしまったりすること

（実例）ジョンソン大統領とその側近集団は、自分たちの決定の基礎となっていた見通しが誤っていると判明した後でさえ、エスカレート作戦を再考しようとはしなかった。彼らは前の決定の批判的検討を避け、むしろその政策が正しかったことを新たに証明することの方に力を入れ続けた。1964年秋、北爆開始前、政策立案者の何人かは6週間の空爆で北ベトナムを和平のテーブルに着かせようと予言した。仮にこれが実現しなくても、あと4週間も続行すれば確実だと答えた。側近集団は度重なる失敗の後も、性懲りもなく、もう少し量を増やせば成功すると言いつづけた。ホワイトハウスのロストウ補佐官は、「お座なりの正当化」役を見事に演じ、新聞記事を選択的にスクラ

ップしたり、事実でないことをでっち上げたりして、米国は勝利への道を歩んでいるとの楽観的雰囲気を集団の中に作り上げるのに貢献した。

- ③ 自分たちの下そうとしている集団決定が含んでいる非倫理性や反道徳性とかには目をつぶってしまうような傾向

(実例) キューバ侵攻作戦の道徳性に関しては、少なくとも2人の影響力のある人物がこれに疑念を抱いた。1人はシュレジンジャー補佐官であり、彼はケネディ大統領やラスク國務長官に宛てた覚え書きの中で強い異論を唱えたが、ケネディ・チームの会合の席に出た時には口を閉ざしてしまった。もう1人はフルブライト上院議員で、彼はケネディ側近グループのメンバーでなかったが、大統領に招かれて疑念を表明したことがある。大統領は、フルブライトの意見に対する側近グループの反応を求めようとせずに別の問題に話を移してしまったのである。また、1966年ジョンソン大統領のグループは、北ベトナムの爆撃目標の選定にあたって4つの基準を設けて作業にあたった。軍事的利点、航空機や乗務員のリスク、他国を戦争に引き込む危険性、市民殺傷の危険性、である。彼らは学校の教師が試験答案用紙に順位づけるようなやり方で重みづけを行ない平均を求めた。このような標準的手続きをとるという儀式に集団が固執したことは、ベトナム民間人殺傷という問題に道徳的に対応しているのだというふうに集団のメンバーに気休めを与えることになっていた。

- ④ 敵の指導者はまともな取引に値しない悪者だとか、こちらの危険な試みを打破するほどの力を持ってはいないというように、他の集団を客観的に見ることをせず紋切型の見方をしてしまう傾向

(実例) ケネディ大統領の側近集団は、カストロ首相の空軍は脆弱なので侵攻開始後すぐに旧式B26爆撃機で殲滅できると考えていた。またカストロの軍隊も弱体で少数の亡命者部隊のみで橋頭堡が確保できると考えていた。加えて、亡命者に呼応した内乱が生じ、これをカストロは抑えきれないと考えていた。これら3つの仮定すべてが誤りであった。この責任の一端は誤情報提供者たるCIAにあるが、CIAのこの計画に疑念を抱かなかったケネディ・チームに最大の問題点がある。また、ジョンソン大統領のグループがその政策を正当化するのに用いた最も紋切型の考え方は、いわゆるドミノ理論で、南ベトナムの赤化を防がなければ明日はハワイが、次週はサンフランシスコが赤化するというものであった。この将棋倒し理論を紋切型的に強く信奉したが故に、もっと洗練された見解をアドバイザーが側近集団の中に注入しようとしても無駄だった。

- ⑤ 仲間間で逸脱した意見をもっているメンバーに対して、異議を唱えることは忠実なメンバーに期待されていることに反することとして、これを変化させようという積極的圧力

(実例) ケネディ大統領は、キューバ侵攻計画に関する一連の会議において、疑問の提起に最も熱心のように見えた。しかし CIA の計画を支持する欠点だらけの議論を側近集団が受容する方向にもっていつてしまった。各会合で、大統領は CIA 代表が討議の主導権を握るのを容認した。側近グループのメンバーの提起した疑問について同じ意見の者が他にいるかどうかを確かめようとはせずに、この疑問に対する CIA 代表の直接的反論を許可した。計画への賛否を問う最も重要な会議には、この計画に疑義を持っていると分かっていたシュレジンジャーを呼ばなかったのである。またジョンソン大統領の北ベトナム爆撃問題に関して、ジョンソン大統領のチームの1人が疑問を表明する時はいつも、彼を飼い馴らすようなソフトな社会的圧力が用いられた。反対意見を持っていてもそれを外部に漏らさないこと、集団の基本方針にまでは挑戦しないこと、これらを守れば、この反対者は温かく遇された。このような、飼い馴らされた反対者は新聞係秘書のモイヤーズで、彼が会議にやってくるとジョンソン大統領は「爆撃阻止屋さんのお出ました」と言って迎えた。

- ⑥ 自分の疑念の重要性などを自分で最小化してしまつて、見かけ上の集団的コンセンサスからの逸脱を個人が自発的に避けようとする傾向

(実例) ケネディ大統領や国務長官宛ての覚え書きの中で、シュレジンジャー補佐官は、キューバ侵攻作戦に関しての強い反対意見をためらわずに述べたが、ホワイハウスでの会議では、自分の意見を抑制する傾向が見られた。彼自身「この作戦の失敗後数ヵ月というもの、私は閣議の席での重大な討議の際に沈黙したことを悔やみ続けた。この無意味な計画に警鐘を鳴らそうとする私の意欲が討議の雰囲気の中でなぜか消滅してしまったのだ」と述懐している。

- ⑦ 多数意見への同調などによって得られた見かけ上の満場一致によって、メンバー全員の間に自分達は正しいのだという見せかけの自信が生じること

(実例) キューバ侵攻作戦のような非常にリスクをとまう行為の選択にあたっては、その政策決定集団の中に幅広い多様な意見が存在することは大変な苦痛である。満場一致という感じが失われると、メンバーは、決定に対する不安に悩まされるし、意見を出し合つて相互に比較検討を重ねて議論を深めなければならないというやっかいな作業が待っている。リスクが大きいきほど、その深刻さがいかほどなのか厳密に見極めるために最適の情報を収集する真剣さが求められる。集団の中に頑固な批判者がいることはこのような不安や面倒さをもたらすのである。それ故、リスクのとまう行為を始めようとする時、人々は潜在的な反対意見が表面化するのを避けたがる。集団のリーダーやメンバーは互いに思考の一致した領域を強調し、意見の異なる点の検討をないがしろにしやすい。シュレジンジャー補佐官は「私達の会

議はあたかもコンセンサスがあるかのような奇妙な雰囲気の中で行われた」と言う。コンセンサスは1つの幻想——主要な参加者が各自の意見の論拠や仮定を明示しない時のみ維持される幻想——であった。ケネディ大統領やラスク国務長官やマクナマラ国防長官という三首脳でさえも、一皮むけば侵攻計画について大幅に異なる見解の持主であった。

- ⑧ 自分たちの決定の有効性や道徳性についての満足感を打ち壊すような批判や情報から自分たちの集団を何としても守り通さねばならないという忠誠者の出現

(実例) キューバ侵攻計画のことを前もって耳にしていたロバート・ケネディ司法長官(大統領の弟)は、彼の妻の誕生パーティの席で、シュレジンジャー補佐官を側に呼んで、補佐官が計画になぜ反対するのかその理由をただした。ロバート・ケネディは冷やかにシュレジンジャーの答えに耳を傾けていたが、「君の言い分は正しいかもしれないが、誤っているかもしれない。しかし大統領は決心したのだ。もうそれ以上の反対は許されない。今は誰もが大統領を助ける時だ」と発言した。ラスク国務長官もまた、侵攻作戦に反対の3人の部外者、ボールズ国務次官、マーロー文化情報局長、ヒルズマン顧問、からの強硬な反対意見をケネディ大統領側近集団に伝達し損ずることによって、忠誠者の役を演じた。もし、ラスクがこの伝達を行っておれば、シュレジンジャーの覚え書きを側面から補強することにより、大統領自身はともかくその側近集団に決定の再考をもたらしていたかもしれない。

等々の指摘がなされている。これらの特徴が集団討議の中に多く出てきた場合、集団は集団性の脳炎症状を呈したとしか言いようなない常軌を逸した行動を展開することになる。

## 《事例2》

さて、私は自分の家族のことを申しました。私はさらにオープンに、自分の家族のことを小説に書いてもきました。たとえば『新しい人よ眼ざめよ』とか、『懐かしい年への手紙』とか、いろいろな小説のなかで自分の子供のことを書いてきました。そしてその障害のある子供が音楽をつくるようになって、そのいきさつをテレビに撮っていただいたりもしたのでした。

立花隆という素晴らしい批評家があります。ノンフィクションの作家です。かれがそのテレビを見て、私にこういわれたのでした。「あなたは光さんという子供を書いている。そして小説をいくつも成功させてきたと思う。しかしあの音楽を聴いて、さらにテレビを見ていると、実際の光さんのほうがあなたの小説に書かれている光さんより大きいと思う。」そうして私は、まったくそのとおりじゃないかと思ったのです。

私は子供を理解しようとしていた、あるいは子供の側に立って生きていこうと

してきた。それはいまでもね、そのようにいうことができるのじゃないだろうかと思います。

一所懸命そうしてきたんだけど、知らず知らずのうちに、自分が家庭のなかで子供より優位に立っているということがあったのじゃないか？ 小説では自分の家庭生活を正直に描写しているのです。それをあらためて読んでみて、どうしても父親としての自分が上位にあって、子供が下位にある、そういう気がした。その下位にある子供は障害を持っている子供ですから、父親ととくに親密な関係があります。自分がその子供を保護している、しかも喜びを持ってそうしているという気持ちがありますから、自分がかれを支配しているというつもりはなかった。自分の家来として、この子供を自分の権力の下に置いているという感じはしないですよ。

ところが、そうであるけれども、実際に小説を読んで批評してもらうと、どうも自分を本質的に上位に立たせているところがあったのじゃないか、それを認めざるをえない。上位に立つということをさらにいえば、圧政者としてかれに向かっているところがあったのじゃないかという気持を私は新しく持ったのです。その考えに立って小説を読みますと、どうもそういう気配が見えてくるんです。すなわち、家庭における親の上位、子供たちの下位、権力を持って支配する者、それによって支配される者という、よくある構図が自分の家庭にもあったのじゃないかということに少し気がつき始めているわけです。

そこから考えると、こういうことが新しい意味において思い出されます。今からもう十数年前になりますけれども、私はあまり摂生しない人間なものですから、そういう生活の積み重ねの上で、とうとう痛風になってしまいました。足が赤く腫れ上がって、もう痛くて、動くことができないんです。一週間ほど動くことができなかった。

たいてい私どもはいつも居間にいまして、その居間のいちばん北の端で息子が作曲して、南の端で私が小説を書いて、家内とほかの子供たちの生活がその中間で行われるということになっています。

痛風になったものですから、その居間の長椅子に私が寝そべて、ずっとそこで一週間、何もできない人間として暮らしていたわけです。そうしましたらば、子供が喜びました、その光という長男が。かれは興奮しましてね、大きい獲物を打ち倒した若い獵師のような感じですよ。私の傍をドンドンドンドン駆けまわって、喜んでいます。私に何かしてやろうとします。水を飲ましたり、辞書をとってくれたりします。

そのうちかれはあまり楽しんでいううちに転んでしまった。私の足の上に倒れる。私は絶叫する。すると、あまりおもしろいものですから、もう一度、こちらのスキを狙って倒れる（笑）。私としては、もう一度絶叫せざるをえない。そういうことがあった。

そのうち私の痛風が治ってくると、またかれは静かな人間に戻って、私のまわりを熱狂して走りまわるということはなくなったのです。もしかしたらあのとき、かれは自分と父親の関係が逆転したと思っていたのじゃないか？ これまでは父親が上位だった、自分が下位にあった。ところがいま父親は何もできない。自分が何もかもやってやらなきゃいけない。水も飲まなきゃいけない。ときどきは絶叫させてやらなきゃ、運動が不足だ、というようなことを思ったんじゃないでしょうか？ そのようにしてかれはきわめて積極的だったんですよ。ところが、また私が立ち上がって歩き始めると、かれはおとなしい子供に戻って、静かに作曲している。

そのうち、何か事情があったのでしょうけれども、かれが妹に少し乱暴なことをしたのです。それで私が怒りましてね、そういうことはよくないと思うといった。怒ってもすぐ和解すればいいんですけど、私はイジイジした性格でしてね、なかなか仲直りする勇気というものが出ない。一日ずっと私は黙っていました。子供に話しかけなかった。

すると、かれは、私がやはり長椅子に寝そべって本を読んでいるところに近づいてくるんです。そして私の足をつかまえて、話しかけている。「いい足だね。もう痛風はいいですか。とてもいい足です。赤くない。肌色をしているな。」——僕の足を褒めてやっています（笑）。

それはこういうことではなかったか、と思うのです。かれはいま、上位にある父親との関係をうまくやるができなくなっている。いま父親よりさらに下位にいる。そして父親の肉体のなかの、上位は頭としますと、下位であるところの足と交渉を持ってみようとした。和解しようとしているわけです、足をつうじて。それはどういうことかという、上位と下位という位置の上での言い方が、支配する者と支配される者との権力関係に、それも肉体的な側面で、かれによって置きかえられているということを意味します。

そもそもね、文学において、上位とか下位とか権力とかいうものを表現するのは、肉体をつうじてやるのが最も望ましいのです。最初ロシア・フォルマリズムの理論家たちがそのように分析したのですが、私はそのとおりだと思います。

そこであきらかになったことは、どうもこれまで息子とのあいだに上位と下位の関係が強くあったらしいということですね。それを私は自覚したわけなのでした。

その上で考えたことですが、家庭においては、父親が子供を愛する、そしていい関係が成立するということはもちろん普通にあることです。大人が子供を保護してやるということも確実にある。ところが同時に、父親が支配者となって、圧政者として子供を迫害するというか、子供に対して力をふるってしまう、シンボリックなカタチでしかそれが現れないとしても、そういうことがあるのを私たちは認めざるをえない。家庭というもの、家族というものの、そういう両義的な、



アムビギュアスな性格があると私たちは認めなきゃならないのではないのでしょうか？

#### 参考文献

1. Festinger, L. 1957 The Theory of Cognitive Dissonance. New York: Harper & Row
2. 蜂屋良彦 1999 『集団の賢さと愚かさ—小集団リーダーシップ研究—』 ミネルヴァ書房
3. Janis, I. L. 1972 Victims of Groupthink: A Psychological Study of Foreign-Policy Decisions and Fiascoes. Boston: Houghton-Mifflin.
4. Newcomb, T. M. 1953 An approach to the study of communicative acts. Psychological Review, 60, 393-404.
5. Newcomb, T. M. 1959 Individual Systems of Orientation. In S. Koch (ed.) Psychology: A Study of a Science. Study 1. Conceptual and Systematic, vol. 3, Formulations of the Person and the Social Context. New York: McGraw-Hill.
6. Newcomb, T. M. 1961 The Acquaintance Process. New York: Holt, Rinehart and Winston.
7. Newcomb, T. M., Turner, R. H. & Converse, P. E. 1965 Social Psychology: The Study of Human Interaction. New York: Holt, Rinehart and Winston.  
(古畑和孝訳 1973『社会心理学—人間の相互作用の研究—』岩波書店)
8. 大江健三郎 1995 『あいまいな日本の私』(79頁～84頁) 岩波書店

(本学教授 社会心理学)